

## ザンビアは「リアル・アフリカ」： ザンビアに住んで8年目の感想

三好 崇弘

「ザンビアー！リアル(=本当の)・アフリカ!!」ゾウやキリンが大草原を走り回り、嵐のような水しぶきが飛び交うビクトリアの滝、腰をフリフリ踊りまくる黒人ダンサー達、次々とアフリカらしいイメージ映像が流れるCMが国营放送テレビから流れてきます。そのテレビ画面が見ているのは、大型ショッピングモールの電気屋にきた、普通のザンビア人たち。彼らは、最新のスマートフォンを携帯し、MP3 プレーヤーを耳につけて、薄型TVの最新機種を物色しています。



ここはザンビア、リアル・アフリカ。でも、本当のアフリカってなんなのでしょう。ゾウとキリンがうようよしている?ビクトリアの滝でシャワーをあびる? みんな肌をあらわに踊っている?多くの日本人がイメージしているアフリカはそのような感じだと思います。

私もザンビアに住む前には同じようなイメージをもっていました。ザンビアに住み始めて早8年目、本当にアフリカ・ザンビアが少しだけわかるようになりました。

### ・最初のザンビアの印象

私が国際協力の仕事でザンビアに初めて来たのは2005年のことです。その時は、妻と1歳になったばかりの長女と一緒にでした。最初のイメージは、「とっても都会だなー」ということです。首都のルサカの空港に到着しましたが、空港から町の中心地までの20分はずっと綺麗な舗装道路がつづきます。特に中心街に向かう道路は日本の援助でつくられた道路です。やはり日本の道路はすごいなー、とおもいました。また以外に緑が多いのも印象的でした。



ホテルに着きました。ホテルは当時一番良いホテルの一つでしたが、それを差し引いてもきれいで、24時間以上にもわたる日本からの移動で疲れ切っていた家族にとっては、ありがたいことでした。インターネットも完備していたことにはびっくりしました。(有料でしたが)

最初の印象のザンビア人は、本当にやさしくておとなしい人たちでした。私はザンビアに来る前に、ガーナ、南アフリカ、ウガンダ、エチオピアといったアフリカの国にいきましたが、ザンビア人は話し方や物腰がとてもソフトな感じでした。これはホテルだけでなく、街中で道を聞いても、同じくソフトな感じでした。直接、これをしてほしいという話方よりは、まずは”How are you? How is your morning? How is Japan?”みたいな、どうでもよい導入部分をしっかりとやってから、本題にはいる、そんな感じでした。

そのあとショッピングにいきましたが、ショッピングセンターにいくと、これまた豊富な食材にびっくりしました。肉・野



菜・魚、そして調味料などたくさんあります。「なにもなくて貧しいアフリカ」というイメージからすると、雲泥の差でした。そして、会計時にびっくり、日本で購入するときの2-3割増しぐらいでしょうか。日本円に直すと、通常5000円ぐらいの買い物が、7000円ぐらいかかることがわかり、「これは生活費を切り詰めなきゃー」と思いました。

ともかく賃貸する家も決まり、妻と娘(1歳)の生活がはじまりました。

### ・長く住んでわかってきたこと。

私の仕事は、農村開発です。ザンビアは人口の7割が貧困ライン以下(一日平均収入が200円以下)にあり、その7割が農村地域に住んでいます。この農村地域に住む人の生活向上のために、地域の自助努力を支援するプロジェクト「孤立地域参加型村落開発プロジェクト PaViDIA」での仕事でした。仕事柄、地方に行くことが多いのですが、そこで見たのは、首都の生活とは比較にならないほどの、貧富の差でした。

昔、吉幾三の歌で「道路もねー、橋もねー、テレビもねー」という歌がはやりましたが、まさに農村の現状はこの歌のようです。道路もない、学校もない、病院もない、そもそも食べていくための現金収入もない、という状況です。まったく「ない」という状態ではないのですが、道路は舗装されていないので雨期にはどろどろになります。学校も近くないので2時間以上通い、また質も非常に低いです。(私は教育のプロではありませんが、実際の教え方を見てみると、先生が一方向的に話していて、また時間もあやふやです) 病院も近くにはありませんし、また、クスリも常備していません。なんとか食べるだけの農業をしている状態です。なので、都市部に移住したいと思っている人も多いです。

といっても、ルサカ首都の中も貧富差が広がっているようです。ルサカには「コンパウンド」と呼ばれる密集居住地区がいくつかあり、無許可で居住する人が密集しながら住んでいます。一度、この近くに迷い込んだことがあり、車を止められ、お金を取られるという経験をしました。(ちなみに強盗などに襲われたら、絶対に抵抗してはだめです。お金だけが目的なので、すべてをなげだすことが大切です) この地区には警察も入れないところがあり、コンパウンドが、犯罪の温床となるスラムに変貌する可能性があります。毎日のように都市部では強盗が起っています。警察も頼りにならないことから、企業や外国人は、また一般家庭でも、警備員を雇うことが当たり前になっているのが現状です。

密集地でお金を取られたことは悔しく怖い思い出ですが、その原因となる都市部の貧困問題は、そもそも農村部の貧困問題から流れ着いたものです。農村地域を活性化することの重要性、自分のプロジェクトの重要性を肌を持って感じました。

さて、「おとなしい」「ソフト」という性格のザンビア人ですが、仕事の相手となると、それが悪い方に行くこともあります。自分の意見をはっきりいわないかわりに、何もしません。話をしている、ザンビア人が反対意見もいわずに「OK」といっていても、私は信用せずに、「本当にいいのか」ともう一度聞き直します。ザンビアでのマナーでは、嫌なことを頼まれたときは「無言・無実行」なのでし



よう。ビジネスをするうえで、気を付けなければいけません。

ショッピングに関しても、最初の考え方が変わりました。

食材が豊富! と思いましたが、日本人が食べたいものを考えると、非常に限られています。例えば、醤油はありません。みりんもありません。醤油は中国産のものがありますが、日本人にはつらい味です。あと、うどんやそばもありませんし、豆腐もありません。ネギもありません。これらのものは、最近では中華料理屋さんで入手できるものもありますが、高いです。反対にチーズやワインなどは日本の一般的なスーパーよりはたくさん種類があると思います。

また、最初に来たときは「高い」と感じた物価ですが、高いのは当たり前で、高いところでショッピングをしたからです。大型ショッピングモールでの綺麗なスーパーには、外国産の食材が並びます。反対に道端で普通のザンビア人が食べるものだけ買ってあげれば、安いです。あまりいい例でないかもしれませんが、男物のジャケットを道端で買ったなら1000円以下でした。また、農村部では畑仕事を一日やってももらっても労賃は200円程度にしかなりません。一方で、都市部でケンタッキーフライドチキンのセットメニューは700円もしますし、ホテルの宿泊費は安い所でも4000円はします。要は、二重経済と呼ばれるもので、貧富の差が激しく、貧しいものは貧しい中での経済圏があり、一方で富めるものは富める者だけの経済圏があるということです。では、私たち日本人は、安いマーケットで買い物すればいいかというと、品数も少なくなりますし、また危険な地域にも踏み込むことになるので、結局、富める経済圏で切り詰めながら生活することになります。



#### ・家族生活

私が2005年にザンビアに来たときには1歳だった長女もすでに9歳になり、さらに家族には長男ができて、いま3歳です。家族で、ザンビアにきて、困ったこと、反対に良かったことがありました。

困ったことは、学校と医療です。学校は数が限られています。日本人学校はありませんので、英語のインターナショナル・スクールに通うことになります。一部補助もありますが、学費は非常に高いです。ルサカには3つのインターナショナル・スクールがありますが、最近では入学待ちのケースも多くなってきています。授業はすべて英語で行われますので、日本語の勉強は各自の家で自習することになります。通信教育は必須になります。ちなみに私は子供の時から通信教育をすべて無駄にしてきた男で、当初、娘が通信教育を継続できるかとても心配しましたが、なんとか遅れながらも続いています。



医療も大変です。大人はなんとかありますが、子供が病気の場合は本当に心配になります。首都ルサカでも、頼りになる病院というのはなかなかありません。一般の国営病院の質は非常に低く、組織としてこの病院だったら大丈夫! というものはありません。個々人で頼りになる主治医を早めに見つけることが大切です。私たちの場合は、たまたま日本の留学経験のあるいいお医者さんを見つけることができました。ただ、それで安心というわけにはいきません。大きな病気をしたときや、輸血が必要な場合は、海外(南ア)などに輸送することが必要なようです。いまだ海外輸送のお世話になったことはありませんが、とにかく大きな病気をしないように、気を付けることが大切です。

反対にザンビアに家族できて本当に良かったと思うことは、ザンビアでは、「子供を邪魔にしない」文化が根付いているということです。街を歩いていても、またレストランにはいつでも、子供に対して、大人たちの対応はとてつもなくフレンドリーです。また、必要な場合には、他人の子でも、しっかりと叱ってくれます。基本的なルールは、「小さい子にはやさしくしなさい」というもので、大きなお兄ちゃんやお姉ちゃんが小さい弟や妹の面倒をみます。なので、列に並んでいても、子供と一緒にだと優先してくれることも多いです。さらに「子供のために、～してほしい」という頼み方をすると、うまくいくことも多いです。例えば、警備員が時間によく遅れてくる場合に、「もし強盗がはいて子供が怖い思いをしたらどうするんだ。子供も君がいないと安心できないといっている。時間どおりにきて、子供を安心させてあげてほしい。それが警備員である君の役割で、そして親である私の役割だ。」という、理解してくれたりします。子供にやさしい社会というのは、家族連れにとっては本当にありがたいです。



反対に、悲しいことですが、最近日本に一時的に休暇で帰ると「日本は、子供を邪魔にしている文化」だなと思うことがあります。街のつくり、サービス、ルール、すべてが大人向けになり、電車に子供連れで乗るだけでも、嫌な思いをすることも多くなりました。いくら経済成長をしたところで、子供を邪魔にするような社会文化は、恥ずべき文化で、この部分についてはザンビアから学ぶことが多いのではないかなと思っています。ザンビアの「大らかな」文化というものが、子供への大らかな対応になっているのかなと思います。(でも、この大らかさが、一つは時間や約束事にルーズなザンビア文化につながっているという皮肉な部分もあります。)

## ・地方の生活

2010年から2012年まで、首都ルサカから900kmも離れたところにある北部州のカサマというところに家族で住んでいました。900kmというと、東京からだと、北海道まで届くか届かないかという距離感でしょうか。

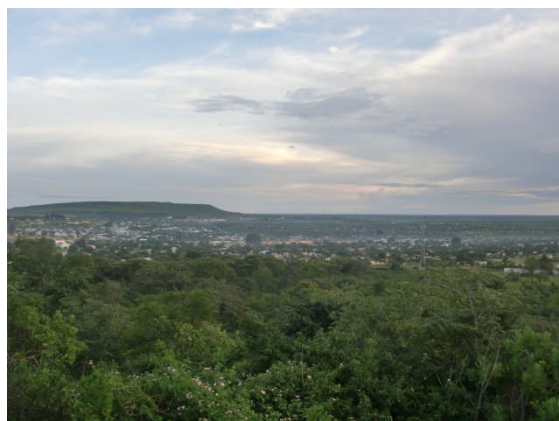
地方生活というのは初めてでしたが、こちらは大変な部分と、良かった部分があります。

大変だったのは、教育と医療の問題がさらに深刻だったこと。一応、名前でインターナショナル・スクールはあるのですが、日本のレベルでいうと村の学校のような規模で、また外国人も5%以下です。教員の教育者としてのレベルもルサカに比べると正直低い状況で、娘は「毎日つまらない～」と言っていました。とはいえ、この地域では一番の学校という触れ込みでしたが、この程度です。医療も頼りになる病院はありません。一時的に外国籍のお医者さんがボランティアなどでできていることがあり、それらの外国人のお医者さんに頼ることになります。が、クスリは質の良いものがないので、ルサカにいくたびにマラリア検査キット、治療薬、狂犬病のワクチンなどの常備薬を購入して保管することになります。輸血は絶対にできません。結局、大きな病気や事故にも会わずに2年半を過ごすことができて、ほんとうに感謝しています。また、停電もよく起きて



いて、当時の長男がちょうど1歳ぐらいに覚えた言葉が「テイデン!」でした。(笑)

脅かすようなことばかり書いていましたが、私自身は北部州での田舎暮らしはとても楽しかったです。車も走っていませんし、自然は豊かで、星空はきれいですし、何より人がゆったりしています。また、スーパーにいても、物が無いことは最初から知っていますので、必要なものだけ買って、後の時間はゆっくり過ごせます。毎日、大自然の中で、夕暮れと朝焼けをみていました。停電も断水も、これはこれで、電気や水のある日常がどれだけありがたいものか体験できましたし、子供たちにもいい経験になったのではないかと思います。たまにですが、同僚の家族と一緒に、満点の星空の下で、BBQで肉を焼きながら、「田舎暮らしもいいものだなー」と思いました。また、仕事でも、農村の現実が一番近いところで働くことができたので、「現場感」をもって活動することができたと思います。



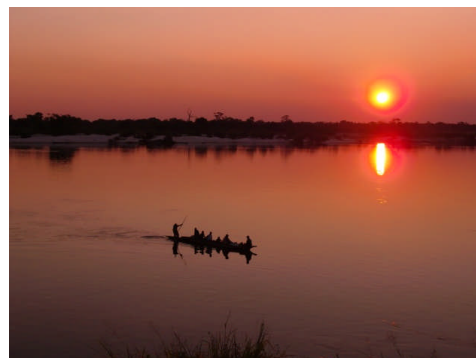
### ・最近の傾向

さて、2年半の地方生活が終わり、2013年2月に首都ルサカに帰ってきました。まず驚いたのは、車の量。朝夕とすごい数の車が道路を埋め尽くします。ひどいラッシュアワーで、数年前までには、20分もかからなかった通勤が、同じルートで40分かかるときもあります。なので、みんな早めに家をでるのが日課となりました。また中国人の増加です。人だけでなく、企業にたくさん入ってきているようで、中国資本の建造物がホテルだけでなく、いくつかみられるようになりました。道路工事でアジア人をみつけると、ほとんどが中国系と思われる現場監督さんが働いています。道路だけでなく、電化製品は中国や韓国のもものがほとんどで、いまやザンビアで日本製といったら「車」だけといっても過言ではない状態です。



電化製品売り場では、薄型テレビがズラッと並び、農村部の平均年収の10倍もするテレビをザンビア人がどんどん買っていきます。また、映画ですが、日本よりも3D映画の数が多く、また料金も割安なので、みんな3Dメガネをかけてみえています。コンピューターの普及率も非常に早く、インターネットの速度は早くなり、気軽にネットを使えるようになりました。仕事柄、研修をする機会が多いのですが、いまは研修で参加者全員がパソコンをもって、そこに考えを書いてもらって、プロジェクターで発表するという「ペーパーレスな研修」というのも珍しくなくなっています。21世紀のアフリカがここにあります。

一方で、農村の多くはいまだに19世紀のような暮らしをしている地域があります。その多様な世界が混在しつつ、アフリカ・ザンビアとして一つになって存在していること。これがリアル・アフリカ、ザンビアの現在なのでしょう。



三好崇弘

モニタリング専門家

ザンビア国農村振興能力向上プロジェクト (RESCAP)

ブログ「ザンビア日記」：<http://zambia1.exblog.jp/>